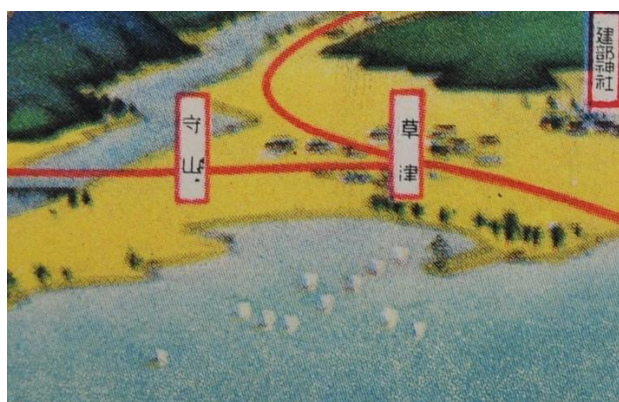
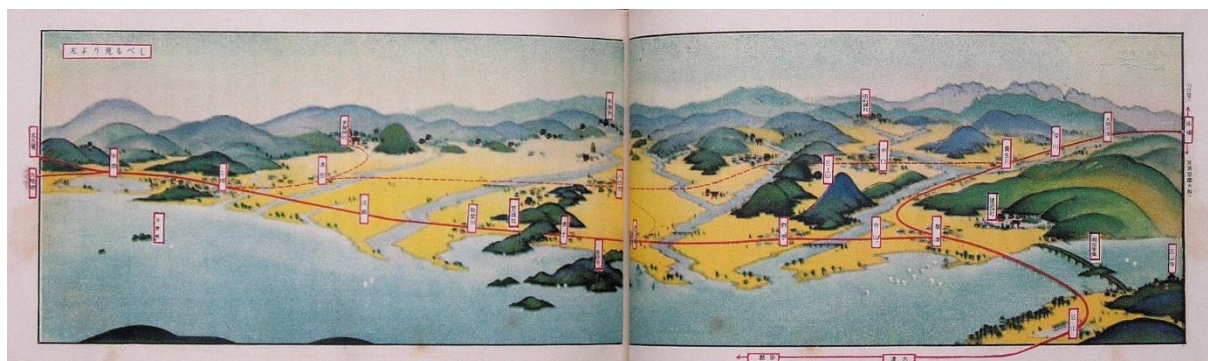


「大正の広重」が描く近江

てつどうりょこうあんない
鉄道省編・吉田初三郎画 『鉄道旅行案内』（草津市蔵）



上：「大津」より琵琶湖東側 下左：拡大 下右：表紙

明治時代を迎え、西洋のさまざまな文化や技術が日本にもたらされますが、その中でも画期的だったのが、鉄道です。明治5年(1872)に日本初の鉄道が開通して以降、鉄道網は日本全国に広がっていくとともに、鉄道を使った旅も一般的なものとなっていきます。

『鉄道旅行案内』は、大正10年(1921)に鉄道省より発行された旅行案内書です。全国の国有路線の沿線案内で、運賃などの各路線の紹介とともに、沿線の名所などが掲載されていますが、特に目を引くのが鮮やかに彩色された鳥瞰図です。巻頭の例言でも、「汽車の窓から見ゆる景観図は、新たなる試みとして、本年始めて挿入したもの(原文ママ)」とあり、当時としても珍しいものであったことが分かります。

この鳥瞰図を描いたのは、大正から昭和にかけて活躍した画家、吉田初三郎(よしだはつさぶ

ろう、1884~1955)です。多くの鳥瞰図を描いた初三郎は「大正の広重」と呼ばれ、人気を博しました。初三郎は、鳥瞰図を描くにあたって、事前にその土地の歴史などを調べ、現地まで赴いて、大量のスケッチをしたと言われています。初三郎の美しい鳥瞰図の秘密は、その綿密な事前取材にあったのかもしれませんが。

「大津」のページには、2つの鳥瞰図が掲載されており、ひとつは琵琶湖の東側を描いたもの、もうひとつは琵琶湖の西側を描いたものです。草津が含まれる東側の鳥瞰図には、赤い実線で国有鉄道の路線が描かれ、点線で近江鉄道の路線が示されています。草津周辺の湖上にはいくつかの船が描かれており、常夜燈らしきものが確認できる少し飛び出した部分が、かつて江戸時代に「矢橋の渡し」として栄えた矢橋港です。

(令和3年11月・草津宿街道交流館 岡田 裕美)